



長尾和宏(ながお・かずひろ) 医学博士。東京医科大学卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

「来年はどうしてもパリに行きたいわ」。死の3日前、友人のカルーセル麻紀さん(79)にそんな電話をかけていたそうです。世界的なバイオリニストで声楽家の佐藤陽子さんが、7月19日に静岡県熱海市内の病院で亡くなりました。享年72。死因は、肝臓がんとの発表です。

闘病の詳細は明かされていませんが、カルーセルさんのブログによれば、「麻紀さんから送ってもらった梅干しでこれから一杯呑むわ」と、その電話で話していたそうです。僕はこの言葉に少し安堵しました。肝臓がんで入院していたのなら、病室での飲酒は許されるわけがない。ということは、おそらく在宅医療を入れてギリギリまでご自宅で過ごしていたのでは? しかも、お酒を呑める気力があるほどしっかりしていたということ。

267 バイオリニスト 佐藤陽子



主治医の先生が「少しならばいいですよ」と、お酒をOKしていたのかもしれないですね。それが、在宅医療のいいところです。ルールで縛ることなく、人生の最終段階で、その人がやりたいこと…旅行でもラーメンでも麻雀で

も、お酒でもタバコでも、叶えられる範囲で許容をすること。たとえ数日人生が短くなったとしても、満足いく最期であればいいじゃないか、というマインドが在宅にはあります。

陽子さんの最愛のパートナーであり、芸術家として世界的に活躍されていた池田満寿夫さんが63歳という若さで急死されたのは、1997年のこと。当時、陽子さんは47歳でした。

「突然倒れて、〈ただいま〉、も〈お帰り〉もなかった。18年一緒にいた。普通の夫婦の3倍一緒に

にいましたけど、それでも短かった。彼から真心を学んだ」。最愛の人を失うには、47歳はあまりにも若すぎる年齢です。しかし陽子さんはその後も二人が暮らした熱海を離れた。

2003年の『婦人公論』のインタビューで、陽子さんは最愛の人の死をこのように振り返っています。

「あのときは、亡くなったんだという心境ではなかった。いないのが不思議という状況でした。(中略)寂しさは百箇日を過ぎたころから、恐怖に近いくらいありましたね。自分が生きていることの方が、不思議なくらい」

別のインタビューではこう語っています。「一番悲しいことは私の最大のバイオリンのファンを1人失ったこと。でもこれからもバイオリンを弾くたびに彼が聞いていてくれると思う」

この四半世紀、ずっと彼を想ってバイオリンを弾いていたはずですが。今再び天国で池田さんの拍手に迎えられていることでしょうか。2人の愛よ、永遠に。

満足いく最期に少し安堵